

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内

洛友会

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

075-753-5270

www.rakuyukai.org

持続可能な

鉄道経営を目指して

関西支部長 井上 欣也（平1年卒）



に親近感を持つようになったと感じています。

現在関西支部においては、幹事の方々の取り組みにより、より持続可能な運営方法に改められたのではないかと思います。

さて卒業後は、研究開発を突き詰めるよりは、電気工学の知識を幅広く活かせる仕事の方が自分には向いているのではないかと考え、京阪電気鉄道（現京阪ホールディングス）に就職しました。

電気系学科出身で鉄道会社に入社しますと電気部か車両部に配属となるのですが、電気部は変電所やそこからの送配電設備、運行管理システムやATS（自動列車停止装置）などの信号設備、列車無線や光ケーブルネットワークなどの通信設備、エスカレータ・エレベータ・空調機器・照明機器等の駅設備など、多岐にわたる電気施設的设计や保守を担当します。

本年度の関西支部長を仰せつかっております、1989年卒業の井上と申します。在学中は原子エネルギー工学やヒューマンインタラクション専攻の若林研究室で、吉川先生や下田先生にも大変お世話になりました。

洛友会関西支部との関わりにつきましては、1995年と2010年に幹事会社を務めさせていただきました。従前は総会や家族見学会も含め、幹事会社が1年間すべてを担当するというスタイルでしたので、卒業生の少ない企業としては少なからず負担感があったのですが、その分、洛友会

は鉄道車両の設計、保守を担うわけですが、その中でもモーターやその制御装置、電気ブレーキや各種情報装置などを専門分野にすることとなります。

しかしながら、そのまま技術者としての職を全うする例は多くなく、私の場合はその後運輸部門に転出し、乗務員・駅係員の資質管理や事故防止対策の実施、運行ダイヤの作成、当社初となる座席指定車両・プレミアムカーを初めてする増収、営業施策などに携わりました。

そして、現在では京阪グループの運輸業（バス事業等を含む）全般を管轄するようになっていたのですが、ここで、京阪電気鉄道の経営状況について少し触れさせていただきます。

昨今の物価や人件費の高騰は皆さまご承知のとおりかと存じますが、当社におきましては昨年10月に1995年以来、30年ぶりとなる運賃改定を実施させていただきました。

国土交通省に申請した改定率は定期・定期外を合わせて13%であり、その結果、京阪ホールディングスと分離発足した鉄道事業となった2016年度以降では最高益を計上することとなりました。

しかし、運賃改定というのは、今後の費用が収入を上回る（会社会計上の赤字とは異なる）見通しであることを試算し認可されるものですので、裏を返せば会社の収支は厳しい状況にあることを示すものでもあります。

その最大の要因は少子化や関西の地盤沈下による沿線人口の減少に他ならないのですが、1991年度に4億2千万人であった当社の輸送人員は、2025年度には2億7千万人と35%減少し、中長期的にも減少の一途をたどることはもはや避けられません。

そして、これまでのデフレ環境下では運賃改定もままならなかったわけですので、その間も民間企業として利益を出し続けるためには費用の削減を積み重ねるしかなくなったことは自明です。

鉄道会社の最大の使命は輸送の安全確保でありますので、ここからは安全を最優先としながらも取り組んだ数々の効率化施策の中から一部の事例についてご紹介させていただきます。

まず、車両の検査について、4年または走行距離60万km以内の実施が法律で定められた重要部検査というものがあるのですが、それを分解検査から在姿で可能な非分解検査としました。

変更にあたっては、重要装置である台車の設計や施工の信頼性を向上する事により、8年に一度の全般検査での分解で可とする耐久性を有する事を証明し、検査工程の大幅な短縮を実現しています。

次に駅業務についてですが、全駅にインターホンおよび遠隔で駅務機器（改札機や券売機）の操作ができるシステムを導入し、駅係員がいなくても中央の管理センターから同等の対応が可能となるようにしました。

その結果、全89駅のうち3分の1程度の駅が無人、半数以上が夜間無人という体制になりましたが、お客さまから特段のご意見はいただいていないという状況です。

同じく駅について、IC乗車券の普及（90%以上）に伴い、IC乗車券専用改札機を増やしたり、券売機の台数を削減することが可能となりました。磁気乗車券対応の券売機や改札機は非常に高価であることから、設備投資額の抑制につながっています。

今後は新たに導入したQR乗車券の機能拡充により、磁気乗車券の完全廃止を念頭においているところです。

ダイヤについても前述の輸送人員の減少に鑑み、需要に応じた適正なものとなるよう適宜改定しています。改札機データを活用した各駅間相互の乗車数に加え、人員調査による列車ごとの乗車人員を把握する事で、1列車あたりの乗車率が高くなり過ぎないよう列車本数を調整しています。

列車本数が減ると、乗務員数だけでなく動力費（電気料金）も削減することができ、同時にCO₂排出量も低減できることからSDGsに貢献できる施策でもあります。

また、編成両数についても必要に応じて見直しています。特急や準急と比べて乗車率が低くともまっている普通（各駅停車）について、編成両数を7両から原則4両に変更しました。

車両価格も高騰している事から

車両更新費用を大幅に抑制できることはもちろん、4両編成で実績のあるワンマン運転の拡大も可能となっています。

そしてワンマン運転については、人件費の削減以上に深刻さを増す労働力不足問題と密接に関連しています。さらにはATO（自動列車運転）の技術を取り入れた、動力車操縦者（運転士）免許を必要としないGATC（添乗員付き自動運転）についても視野に入れていきたいと考えています。

以上、どちらかというとネガティブな内容になってしまった感もありますが、いずれの施策についても技術革新や従来の固定概念に捉われない斬新な発想がなければ成し得ないものばかりです。

この拙文に目を通していただいた方が、少しでも鉄道会社に関心をお持ちくださり、私たちの取り組む経営課題や社会問題の解決に力を貸していただけたら幸いです。

会員寄稿

洛友会の皆様、並びに電気系学科の後輩諸君へ

高田 裕章

(昭和60年卒・東京支部)

京都大学電気系学科を卒業し、1987年に総合化学メーカーである住友化学に入社して以降、私のエンジニアとしてのキャリアは、一貫して化合物半導体材料

(GaAs, GaN, InP)と共にありました。研究開発から顧客対応、営業、そして事業戦略まで、半導体の進化の歴史とともに歩みそして学んできたといっても過言ではありません。そのため国内での事業活動に加え、2000年頃からは台湾、韓国、米国へと出張する機会が増えました。50歳を過ぎたからは、2013年からの約4年間は台湾・台南、2021年からの約5年間は米国アリゾナ州フェニックスの現地子会社で駐在員として過ごすという、得難い経験をさせていただきました。

本稿では、この海外駐在という転機の中で私が見た光景と、そこから得たささやかな考察を共有したいと思います。

「現場」という名の戦場と日本的DNA

日本、および台湾と米国という世界の半導体産業を牽引する国々で働いて痛感したのは、意思決定プロセスの決定的な違いです。よく「海外はトップダウン、日本はボトムアップ」と言われますが、それは単なる組織論を超え、産業の勝敗を分ける要因となっています。

海外の現場では、全体方針はトップが強権的に決定しますが、現場には非常に広い裁量権が与えられています。彼らは半導体産業が「時間との闘い」であることを本能的に理解しており、多少の不備があっても「走りながら修正する」ことを厭いません。私も海外

の現場での交渉では、自分たちの守りたい本質的な部分以外は「その場」での調整を厭わず、本社サイドには事後承諾で済ます、というのを度々行いました。このことが結果的には「意思決定に時間をかけずに交渉相手として信じられる奴」という評価を得ることができたのだと考えています。

一方、日本企業は現場の意見を丹念に吸い上げることで完成度を高めます。ある意味これは「執着」と言ってもいいでしょう。他の国には見られない日本ならではの特徴で、素材や装置開発といった、長年の経験とエキスパート同士の緻密なすり合わせを要する領域において強みとなることを再認識しました。我々が持つ「長期的な視点で物事を考える」力は、今後も世界で戦うための最大の優位性であり続けるはずですし、ぜひそうしていかなければならないと思います。

異国の風土に触れる

——「体験」の重み——

現地での仕事が激務であればあるほど、仕事から離れる機会を作り、「その国でなければ味わえないこと」、すなわち多くの現地経験をj得るよう心がけました。

台湾・台南での生活は、孔子廟や安平古堡といった歴史遺産、太湖閣峡谷の壮大な自然、あるいは中国との緊張感に包まれた金門島といったものに歴史の重層性を感じただけではありませんでした。私のような「中国語が分からない」

日本人が買い物などの生活の場面において困っているのを見つけると、どこからともなく日本語を話せる台湾人が現れ、さりげなくサポートしてくれる……そんな地元の人々の日本への親しみにあふれた愛情を感じるものでした。

そしてアリゾナでの米国生活は、まさに「世界の中心」のスケール感を教えてくれました。グランドキャニオンやモニュメントバレー、イエローストーンといった大自然は、人間のちっぽけさを突きつけてきます。なかでも写真の「ザ・ナローズ」というザイオン国立公園内の巨大な渓谷を流れる川を専用の装備のもとで歩いて上る：というのは自然との一体感を十分に感じさせるものでした。



またそれとは対極の世界の文化を牽引するエンターテインメントの底力（ハリウッドやプロードウェイ）、盛んなスポーツ（メジャーリーグ、アメリカンフットボール、ゴルフのPGA/LPGAのメジャー大会）を幾度も観戦する機会に恵まれ、最高峰のプレーを目の当たりにしました。また週末にはよく妻と二人でゴルフに出かけましたが、一緒にプレーに興

じる市井の人々との出会い（セドナの高校生ジュリアン、地元ゴルフ場受付のブライアン、トミー・ジョン手術で療養中のカナダメジャーリーグ投手……）も私にとつては忘れられないものとなりました。



後輩たちへ、そして感謝を込めて帰任した今、改めて思うのは「百聞は一見にしかず」という言葉の重みです。異文化への理解は、文献やインターネットを通じて得る「見る・聞く・話す」の知識とは決定的に異なります。現地の中に入り、同じ釜の飯を食い、生活の苦楽を共にして初めて得られる「肌感覚」こそが、これからのグ

ローバル社会で生き抜くための本質的な知見となります。洛友会の後輩の皆さんには、ぜひチャンスがあれば自ら進んで異文化の渦中に飛び込んでいってほしい。苦勞もありますが、そこで得られる視座の広がり、一生の財産になることを約束します。

最後に、二度の海外駐在を共に乗り越えてくれた妻に、この場を借りて心からの謝意を伝えたいと思います。現地での慣れない生活は、私よりも彼女に大きな負担をかけたはずですが、彼女の献身的な支えがあったからこそ、私は企業人としてだけでなく、一人の人間として、異国の地で全力を尽くすことができました。ありがとう。

今後も、海外で培った縁を大切に、この地から世界へ続く橋渡しを続けていければと考えています。長い駐在生活の中で見つけたこれらの小さな気づきが、皆様の何かの刺激になれば幸いです。

私と登山

立木 孝典

(平20年卒・中部支部)

趣味の登山の話をしたいと思います。まさに自己満足以外の何物でもないですが、好きなことを好きなだけ書ける機会をいただけたと拡大解釈して、書かせていただければと思います。

登山のきっかけは愛知県から岐阜県への転勤でした。車で15分も行けば登山口に行けるというアクセスの良さと、歳を重ねて体重が

増加の一途を辿り、何となく「岐阜に來たし1番近くの山へダイエットでもしようか」と、軽い気持ちで登ったのが、初めての登山でした。山自体は金華山というロープウェイで山頂の岐阜城まで行けて、普通に登っても標高差300m程度です。難所もなくいわゆる初級の山でしたが、これまで大した運動もしてこなかったこともあり、登山結果は散々なものでした。途中からは進む時間より休む時間が多く、何とか登れたのを覚えています。自分が登山というのを甘く見ていただけなのですが、下山した時の気持ちはなんとなく悔しくて、少なくともこの山を楽に登れるようになろうと思ったのが、趣味となるきっかけでした。まずは、最低限の装備を少しずつ揃えて、毎週行くことに決めました。

何回か行くと、体力がついてきたのかだんだん登る時間も短くなり、休憩も道中3回、2回、1回と減って、最後は休憩無しで登りきることができました。そうなる、次の目標が欲しくなり、せっかく装備も少しずつ揃えてきたのだからと、もう少し標高差のある山に行ってみたくなり、金華山のすぐ北の山なのですが、標高差500m程度の百々ヶ峰にチャレンジすることにしました。このころから体重が落ちてきたのも山へ背中を押してくれました。まさに山が趣味となった瞬間でした。その後は毎週欠かさず登り、目標設定↓踏破を繰り返し、1年程で標

高差2000m程度(例えば中央アルプスの空木岳や各務原アルプス縦走など)であれば問題なく踏破できるようになりました。



登山のどこが良いのか、ただ疲れるだけでは?とよく聞かれますが、理由は登山をする人それぞれあると思いますし、疲れるのは紛れもない事実ですが、私は目標として設定した山を踏破した時の達成感が1番です。これまでは、体力的に行けないと思っていた憧れるだけの山を、体力をつけ装備を整えて踏破して、山頂ですつと景色を眺めている時や、何十kmもある縦走ルートを踏破し終えた時の達成感、それが一番の楽しみとなっています。まさにレベルを上げて、武器防具を揃えてボスに挑むゲームに非常に似た感覚でした。

さらに登山の楽しみとしては一年中楽しめる、季節に応じて姿を変える色々な山に行けるという点があります。少し誇張しましたが、正確には季節に応じて行く山を変

えているというのが正しい表現です。昨今の猛暑もあり、真夏に低山を選ぶと、冬とは違い同じコースでも体力をかなり削られる感覚がありますし、気持的に辛いものがあります。こんな時こそ、日本アルプスなどの高山が気温の意味でもってこいであり、逆に冬は高山が雪で閉ざされる代わりに低山の縦走をするのに良い季節となります。春は雪解けに併せて高度を上げて、雪解けの景色と登山道を楽しみ、秋は紅葉に合わせ行く山の高度を下げて長く紅葉を楽しむことができます。つまり季節に応じて登る山の標高を変えることで一年中楽しめます!という論理です。

野生の色々な動物に会えるのもどちらかと言えば登山を楽しくさせるものかなと思います。昨今何かと話題になってきているクマには幸運にも鉢合わせたことはないですが、猿、鹿、イノシシ、狸、うさぎ、リス、珍しい生き物だと雷鳥、カモシカなど、色々な動物に境なく偶然会えるのは驚くことも多いですが楽しい出会いです。雷鳥などは会える場所は限られるものの、人があまりいない場所、時間を選ぶと会えることが多いです。写真の親子は立山の浄土山の山頂で、大半の皆さんが通る室堂(雄山のルートからは少し離れたところ)です。あまりの突然の出会いで、最初は雷鳥だと気づきませんでした。



楽しいことばかり書いていますが、上手いこと書いています。1番は天気です。どれだけ色々な天気予報を調べても、予報通りにならないことがあります。山の天気は変わりやすいと言いますが、加えるならば、山の天気は当たらない(当てづらい)もあると思っています。富士山などは山頂からご来光を見ようと3回ほどチャレンジしていますが、まだ、相性が悪いのか拝めていません。酷い時には写真のように山頂だけ笠雲に覆われており、山頂からだけはご来光が見えないときもありました。



生き物に会えて楽しいと書きましたが、望まない出会いもあります。ヒル(岐阜県の妙法ヶ岳が私の知るヒルの聖地?です。梅雨時は面白いほどの数が、体をくねらせて、靴を登ってきます)、スズメバチ(ハチは色々な山で出くわしますが、どこが一番と聞かれれば、こちらも岐阜県の榎山です。登山道の特には後半はハチに追われ続けるので、登山なのに、走って登り続けることになります。)など色々出て、大変な思いをしたこともあります。これらは先人の登山記録を確認して、時期、時間を選定すれば、ある程度は回避可能なものだと思います。

登山道を見失うことも多々あります。最近では登山アプリが充実しており、GPSとマップが連動しており、また、先人の軌跡も表示されることから、迷うことは少ないもののそれでも迷うことはあります。整備されていない登山道や、林業者用のものと思われるピンクテープなど、迷う要素は沢山あり、自分の向いている方向と、先人の登山軌跡を参考に登山道に戻れるように錯誤します。

このような登山の危険を避けるためには定かではないですが、登山道ではすれ違う時など挨拶をするのが浸透しています。一説によると挨拶すること、お互いのこままでの山情報交換しやすくなると言われており、例えば危ない道、山頂までどのくらい、倒木、落石情報、クマハチ目撃情報、迷い易いなどの有益な情報を多々も

らえます。説はどうであれ、また情報が貰えるか否かもさておき、挨拶すると、どれだけ疲れている、元気なふりをして笑顔で挨拶すると、少しだけ疲れが取れる気がします。

今はまだ歩きはじめたばかりの子供と遊ぶのが、休日の主な業務のため、最近はまだ行けておらず、2ヶ月に1度くらいの頻度で、最盛期と比べると体力もかなり落ちましたが、数年後に子供や妻と一緒に別の楽しみ方を覚えつつ、色々行けたらと思います。

見返してみると取り留めのない誰も得しない話ばかりで申し訳ありません。少しでも皆さんの暇つぶしにでもなっていたら幸いです。



日本酒のすすめ

〜石川編〜

高辻 悠

(平19年卒・北陸支部)



石川県の名物と言えば、皆さん何を思い浮かべるでしょうか?のどろろや甘エビといった海の幸や、金沢カレーや金沢おでんといったB級グルメが出てくる方も多いと思います。ですが個人的には、石川県を代表する名物として日本酒を推したいと思います。

石川県は日本有数の米どころであることに加え、白山からの清らかな伏流水があり、日本酒を造るうえで欠かせない良質な米と水が揃っています。そうした環境のもとで、日本を代表する杜氏(とうじ・日本酒の醸造を司る人のこと)である能登杜氏の職人たちの手によって、石川県の日本酒文化が育まれてきました。

そんなわけで、今回は石川県のオススめの日本酒について紹介したいと思います。ちなみに、私はフルーティー系の日本酒が好きなので、オススめもそういった系が多いです。

農口尚彦研究所(農口尚彦研究所)

変わった名前ですが、研究所まで含めてお酒の名前です。農口尚彦氏は前述した能登杜氏、その中

でも能登杜氏四天王と呼ばれる杜氏の一人であり、90歳を過ぎた今でも現役で日本酒を造り続けている職人です。かつては石川県内の酒蔵で菊姫や常きげんといったお酒を造っていましたが、現在は私の地元石川県小松市の山奥で酒造りを行っています。

お酒の傾向としては、最近流行りのフルーティー系で飲みやすいものから、山廃と呼ばれる昔ながらのザ・日本酒のような力強いものもあります。値段は3000円〜といったものが多いのでやや高いですが、その価値は十分あります。ちなみに地元の酒屋さんが言うには、「農口さんは商売屋だからね」。売れるものはいい値段つけるのよ。」とのことでした。

入手は石川県まで来れば結構簡単で、小松駅や小松空港に多くの種類が置いてあります。また、東京駅のはせがわ酒店や京都タカシマヤなど、石川県以外でも扱っている酒屋が多いです。

ですが一番オススめなのは、小松市の酒蔵に直接訪れて、酒蔵見学と試飲をしたうえで購入することです。酒蔵見学は5500円とかなりいい値段しますが、1本40000円のヴァンテージの限定酒を試飲することができ、私も実際にきましたが、とても満足できました。ただ、酒蔵まではアクセスがあまりよくない(バスが1日に数本しかない)のが難点です。代わりに、金沢駅の構内に直営のバーがあり、そこでも飲み比べなどができるので、そちら

もオススめです。

手取川・吉田蔵u(吉田酒造店)

こちらは石川県白山市にある酒蔵です。北陸の主要道路である8号線から少し寄り道すれば行けるので、アクセスはまあまあよいです(ただし車はほぼ必須)。ちなみに、近くには天狗舞を出している車多酒造という別の酒蔵もあるので、あわせて立ち寄るのもアリです。

特徴的なのは、手取川と吉田蔵uという2種類のブランドがある点です。手取川は昔ながらの製法を重視したスッキリ系の味わい、吉田蔵uは地元の素材を用いたテロワールとモダン山廃によるフレッシュな味わいと、違う方向性のお酒を造っています。私が特に好きなのは吉田蔵uで、アルコール度数が9%と低く爽快な飲み口のNight&Danceという銘柄が気に入っています。

また、県外でも飲める機会が多いのもポイントです。前述した東京駅のはせがわ酒店などで扱っていることに加え、日本酒関係の野外イベントにもよく参加しています。例えば、毎年4月下旬に六本木で開催されるクラフトサケウィークというイベントがあるのですが、そちらに毎回参加しています。そうしたイベント限定の銘柄もあるので、非常にオススめです。

宗玄(宗玄酒造)

こちらは能登半島の先つちよの

石川県珠洲市にある酒蔵です。能登杜氏の伝統を受け継いでいる名門の蔵であり、250年以上の歴史があります。2024年の能登半島地震で蔵に大きな被害が出ましたが、なんとか復興が進んでおり、現在はお酒の製造・販売を再開しています。

お酒の特徴としては、米の旨味を出しつつスッキリとした味わいで、特に食中酒に適しています。個人的なおススメは、少々お高いですが、お米らしさとスッキリとした味わいが際立った、お刺身などのペアリングに最適な純米大吟醸です。また、しばらくたてやにこりといった季節限定の銘柄もありますが、そこらはまだ私も飲んでいないです……。

宗玄も県外の酒屋での取り扱いはそこそこあります。特に関西方面では、阪急うめだ本店や大丸京都店で試飲会を開催することもあるようですので、気になった方はぜひ試飲したうえで購入してみてください。

以上、石川県でオススメの日本酒でしたが、いかがだったでしょうか？ いずれも東京や関西で比較的手軽に買えるお酒ではありますが、やはり直接石川県に訪れていただき、石川県の地元の食材とペアリングしながら味わうのが一番良いと思います。地元の酒屋や酒蔵に直接行くと限定酒を買えることもあるので、一石二鳥です。

それでは皆さん、石川県でお待ちしております。

ここ10年の広島の変化

伊藤 達理

(平22年卒・中国支部)

2017年4月号では、11年ぶりに生まれ育った広島市に戻ってきたというところで、戻ってきて感じたことや、自転車生活のすめについて寄稿させていただきました。それから9年以上が経過し、気づけば10年目という一つの節目(?)を迎えることになりました。そこで今回は、ここ10年程度を振り返り、広島市も変わったな、と個人的に感じたことを簡単に紹介させていただきます。なお、余談ですが、前回の寄稿時から紆余曲折あり、具体的には一時期体重が増えてしまったため、カロリー消費量を増やすべく、市内であればとにかく歩く、徒歩生活にシフトしています。運動習慣の一環で始めたものですが、適度な疲労感を感じ地よく、歩くからこそ気づけることもあり、なかなか悪くありません。

・広島駅周辺の再開発

ここ10年で大きく変わった所と言えば、まず広島駅が挙げられるでしょう。2025年3月には新しい駅ビルの「minamo(ミナモア)」がオープンしました。商業施設としての賑わいもさることながら、個人的には、駅と周辺の施設を結ぶペDESTリアンデッキが整備されたことも大きな変化だと感じています。ペDESTリアンデッキは開放的で、しかも比較

的直線的なルートなので行き先がわかりやすく、初めて訪れる人にも歩きやすくなっています。また、駅から周辺施設へ自然に足を向けやすくする役割も担っているように思います。子供の頃、駅周辺をさまざまな方向に通り返る際には、一旦地下に下りる必要があったのですが、たまに出口を間違えて遠回りしてしまったことを思い出すと(もちろん、現在も地下を通るルートは問題なく利用できますが)、随分と進化したな、という印象を受けます。

広島駅では、駅ビルだけでなく、公共交通機関との接続も改善されています。かつてはJRの改札と路面電車の電停が少し離れていましたが、現在は、路面電車が駅前大橋を渡り、そのまま高架でJR広島駅の駅ビル2階まで乗り入れるようになりました(このような形で乗り入れは全国初だそうです)。JRの中央口改札と路面電車の電停が同じフロアになったことで、乗り換えも便利になりました。この高架区間、計画段階では「本当にこんなものができるのか」と思ったのですが、実際に乗ってみると、やはりインパクトがあります。もともと路面電車には平地を走るイメージしかなかったこともあり、初めて高架を走った時は、少し不思議な感覚でした。さらに、この駅前大橋ルートの開業に伴って路面電車の経路も変更され、広島駅から市内中心部(八丁堀・紙屋町方面)までの所要時間は、従来より約4分短縮されま

した。こうして見ると、広島駅の再開発は、単に駅ビルや周辺施設を新しくしただけではなく、駅を起点とする人の動線そのものを改善するものだった、とも言えると思います。

・レモン推し

広島県でのレモンの栽培には100年以上の歴史があり、これ自体は最近始まったものではありません。1953年にはすでに全国一のレモン生産県となっていました。これを全国に向けて積極的にPRする動きが広がったのは、ここ十数年のことだと思っています。象徴的なのが、2012年に始まった県の観光キャンペーン「おいしい！広島県」です(現在は「おいしー！広島」プロジェクトが推進されています)。自虐的なキャッチコピーで広島の魅力はPRする中、日本一の生産量を誇りながら知名度が十分とは言えなかったレモンも取り上げられました。現在では、レモンそのものだけでなく、レモン味のお菓子や食品、調味料等、さまざまな関連商品を目にする機会も増えました。私が暮らしている広島市内でも、ホテル近くのコンプニ等で、観光客向けにレモン味の商品を集めてアピールしているのを時折見かけます。レモン推しという言い過ぎかもしれませんが、「広島といえはレモン」という認識が広がってきたことを肌で感じる所です。

ちなみに、東京・銀座にある広島県のアンテナショップ「ひろし

まブランドショップTAU」も、2022年のリニューアルに合わせて、レモンを思わせる黄色を前面に出したデザインになったとのこと。店舗のWebページでも「瀬戸内広島レモン」を広島を代表する産品の一つとして紹介しており、写真を見る限り、レモン関連商品も多く取り扱っているようです。私自身はまだ立ち寄ったことがないので、東京に足を運ぶ機会があれば、どれほどレモン推しなのか、確かめてみたいと思います。

・広島市中心部の変化

広島市の中心部は「エディオンピースウイング広島」の開業をはじめ、ここ数年で大きく変化している場所ですが、個人的に注目したいのは、2025年3月末にオープンした「広島城にぎわい施設」です。小規模ではありますが、広島城三の丸に飲食店や弓道体験施設等ができ、今後は歴史館の開業も予定されています。これらの施設は広島城と周辺エリアの間に位置しており、「エディオンピースウイング広島」を含む「ひろしまスタジアムパーク」とペDESTリアンデッキでつながる形になっています。こちらも、単純に新しい施設を追加するだけではなく、人の流れを変えることで、周辺を歩いて回ってもらおうとしているように思います。

広島というと、原爆ドームや宮島、お好み焼きがまず思い浮かぶかもしれませんが、もちろん、これ

らは今も広島を代表するものですが、ここ10年ほどで、駅や交通、街の景観、さらには名産品のPR等にもさまざまな変化がありました。広島を訪れる際には、街の中で見つかるこうした変化にも目を向けてみると、以前とは少し違った姿が見えてくるかもしれません。

同窓会だより

久門尚史先生教授就任記念の集い開催報告

日時…7月4日(土) 11時30分～
場所…京都高雄もみぢ家別館
川の庵

このたび、同窓生の久門尚史氏(日5卒)が京都大学大学院工学研究科電気電子デジタル理工学専攻の特定教授に就任されたことを祝い、当時の研究室メンバーを中心とした有志で「久門先生教授就任記念の集い」を開催しました。

当日はあいにくの雨模様となりましたが、関東・中京・関西から多くの同窓生が集まりました。約30年ぶりの再会となるメンバーも少なくありませんでしたが、顔を合わせた瞬間に学生時代へと時間が戻り、終始和やかな雰囲気包まれた会となりました。

会の冒頭では久門先生からご講演をいただき、ご自身の研究・教育者としての歩みとともに、京都大学の将来構想についてお話し

いただきました。とりわけ印象的だったのは、京都大学が文部科学省の「国際卓越研究大学」に認定され、今後25年にわたり世界最高水準の研究大学を目指して大規模な改革を進めていることでした。従来の講座制を見直し、研究領域ごとの大きな組織へ再編することで、若手研究者がより活躍できる環境づくりに取り組んでいるとのことでした。生憎、学生の電気への関心が低下しつつあるなかで、電気電子工学がAIやロボットなど最先端技術を支える基盤技術であり、その魅力を次世代へ伝えていくことの重要性についても熱く語られました。

続いて、2024年に名古屋工業大学教授に就任された岡本英二先生より、5Gをはじめとする最新の無線通信技術や産学連携の取り組みについてご講演いただきました。特に、自動運転や車両の電動化を背景として車載エレクトロニクス分野で産学連携が進む中、現場で偶然にも多くの洛友会同窓生と出会い、協働する機会が少なくないとのお話が紹介されました。同窓生の技術力の高さと人的ネットワークの広がりを改めて実感する機会となりました。

その後の懇談では、仕事や研究の話題はもちろん、健康や趣味、思わぬ失敗談までさまざまな近況報告が飛び出し、笑いの絶えないひとときとなりました。また、研究室時代の思い出話にも花が咲き、特に恩師の奥村浩士先生の話題では大いに盛り上がりました。

「自由に研究をさせてもらえた」「ここぞという場面では厳しく鍛えられた」など、それぞれの思い出が語られ、学生の自主性を尊重しながら温かく見守ってくださった先生の存在が、今の私たちの礎となっていることを改めて実感しました。現在はご健康を案じる状況とうかがっておりますが、先生への感謝の気持ちと一日も早いご快復を願う思いを参加者全員で共有し、同窓の絆の深さを再確認する機会となりました。

今回の集いを通じて、京都大学電気系の同窓生が多様な分野で活躍しながらも、こうしてつながり続け、互いに刺激し合えることの価値を改めて実感しました。今後も洛友会が会員同士の交流と社会への貢献を支える場として発展していくことを願いつつ、盛会のうちに閉会いたしました。

松野 知愛(平5年卒) 記



支部だより

令和8年度洛友会東京支部総会・講演会開催報告

令和8年6月21日(日)、洛友会東京支部は、ビジョンセンターグランデ東京浜松町にて令和8年度東京支部総会を開催しました。本年度も現地会場に加え、Microsoft TeamsによるWeb配信を併用したハイブリッド形式で実施しました。

総務幹事の進行により開会し、安藤隆朗支部長より開会の挨拶がありました。安藤支部長からは、前年度より取り組んできた若手を含む洛友会活動の活性化について、一定の成果が見え始めているとの所感が述べられ、引き続き次年度に向けて活動を継続・発展させていきたいとの方針が示されました。



安藤支部長による開会の挨拶

続いて、令和7年度の行事・活動報告が行われました。昨年度の支部総会はKKRホテル東京にて開催され、講演会では住友商事株

式会社の兵頭誠之様を講師にお迎えし、エネルギーを取り巻く国際環境や日本政府のGX2040ビジョン等を踏まえたご講演をいただきました。また、秋の講演会では、慶應義塾大学特任教授の渡辺日出雄様より、量子コンピュータの基礎から最新動向まで幅広くご講演いただきました。春の見学会では、午前に理化学研究所(和光)、午後に迎賓館赤坂離宮を訪問し、迎賓館では東京支部会員の来山様にご案内いただきました。さらに、卒業後間もない若手会員を対象とした若手交流会も開催され、世代を超えた交流機会の創出に向けた取り組みが報告されました。

趣味の会については、囲碁会、麻雀会、ゴルフ会、洛謡会、テニスの活動状況が紹介されました。拡大クラス会についても、各会の活動状況が報告され、各年次・グループにおいて同窓の交流が継続されていることが共有されました。一方で、各会とも新規参加者の確保や連絡先の現代化が継続的な課題であることも確認されました。

決算報告では、Web配信の内製化や会場選定の工夫により支出削減が図られたこと、また春の見学会ではバス代・燃料費等の高騰により当初計画を上回る支出となったことが説明されました。令和8年度への繰越金等の報告がされ、事業運営の健全化に一定の成果が見られたことが報告されました。

役員改選では、安藤隆朗支部長が退任され、田村俊之様が新支部

長に就任されました。田村新支部長からは、AIの急速な進展に伴い、電力・エネルギー、半導体、電気電子技術の重要性が改めて高まっていること、また人材流動性が高まる時代において、洛友会が横や斜めのつながりを支える場として重要な役割を担うとの抱負が述べられました。

令和8年度の活動計画としては、支部総会・講演会・懇親会に加え、秋の講演会、春の見学会、若手交流会、趣味の会、拡大クラス会を継続して実施していく方針が示されました。また、学年幹事が空席となっている年次が複数残っていることが課題として共有され、各年次の連絡・交流の要である学年幹事の充足に向け、役員・幹事を中心に候補者探索と打診を進めていくことが説明されました。拡大クラス会幹事や先輩会員の皆様にも、候補者の紹介や声掛け等での協力が呼びかけられました。

総会後には、Starlight Engine株式会社 最高技術責任者（CTO）の伊庭野健造様を講師にお迎えし、フュージョンエネルギーをテーマとした講演会が行われました。伊庭野様は京都大学大学院エネルギー科学研究科で博士号を取得され、フュージョン炉設計およびプラズマと材料の相互作用研究に長年従事されてきました。

ご講演では、1970年大阪万博のタイムカプセルのエピソードに始まり、フュージョンエネルギーを長期的な人類社会を支える

技術として捉える視点が示されました。あわせて、AIやデータセンタ需要の拡大による電力需要の増加、日本のエネルギー需給の課題、核融合反応の基礎、トカマク方式等の技術的特徴について、分かりやすくご説明いただきました。

さらに、フュージョンエネルギーは「資源」ではなく「技術」によってエネルギーを生み出すものであり、多様な要素技術の統合が不可欠であること、また米中を中心に国際的な開発競争が激化していることが紹介されました。後半では、Starlight Engine株式会社が推進する「FAST」プロジェクトについて、高温超伝導技術、発電実証、保守・交換技術、サプライチェーン整備など、社会実装に向けた具体的な展望が語られました。

質疑応答では、日本の強み、人材育成、中国との競争、レーザー核融合の可能性、将来のプラント運営・設置場所など、幅広い質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。

講演会終了後には、隣室にて懇親会が開催され、参加者同士が近況を語り合うとともに、講演内容をきっかけとした活発な意見交換が行われました。総会・講演会を通じて、東京支部の活動を振り返るとともに、AI・エネルギー・フュージョンといった今後の社会を左右する重要テーマについて学びを深める、充実した一日となりました。

2026年度洛友会東北支部総会報告



集合写真

台風のもたらす豪雨の影響で鴨川が溢れそうな、2026年6月27日（土）、仙台市内の「ホテルモントレ仙台」で、東北支部総会が対面で開催されました。京都とは違って仙台は気持ちよく晴れ渡り、本部から佐藤高史教授をお招きし、東北支部からは3名の会員が出席して開催されました。

総会は伊藤支部長の開会宣言で始まり、2025年度決算報告、2026年度予算案について説明があり、質疑応答を経て、参加者全員の賛成にて承認されました。その後、佐藤先生から本部の活動状況や電気系教室の近況について

報告がありました。洛友会のホームページが復旧したこと、入学式に出席する父母の参加が増えたため、学外の会場で式典が行われるようになっていくとのこと。出席者から、自分の頃は入学式や卒業式が行われた記憶がない、との声も飛び出しました。学生の進路先は時代を映しますが、残念ながら、今年も東北に縁がありそうな会社が見当たらず、東北支部の会員は今後も増えることはなさそうです。



懇親会では、一年ぶりの再会を喜びながら参加者の近況報告に始まり、学生時代にお世話になった先生方の思い出話、AI、銀河系など話題は多岐にわたりました。懇親会は予定時間を大幅にオーバーしましたが、会場の閉店時間となり、名残を惜しみながら大盛り上がりの中にお開きとなりました。

伊藤 篤（平1年卒）記

中部支部総会報告

令和8年6月27日（土）、東京

第一ホテル錦にて、令和8年度中部支部総会が開催されました。当日は、台風の接近で開催が危ぶまれましたが、大きな混乱もなく予定通り執り行い、洛友会本部ならびに電気系教室を代表して小嶋浩嗣先生をお迎えし、中部支部からは20名の会員が出席しました。

支部総会では、冒頭、松谷支部長から、「顔をあわせて色々と話をする機会は本当に大切で、この総会も、その一つの手段として使っていけるような、楽しい場にしましょう。」との挨拶がありました。続いて、

・令和7年度の支部事業報告・決算報告ならびに会計監査報告
・令和8年度事業計画および予算の審議

について議事を進行し、全会一致でご承認をいただきました。

総会終了後、来賓の小嶋先生から洛友会本部と電気系教室の現状というところで、電気電子デジタル理工学専攻（高度情報専門人材の育成の中心となる新領域）が4月に設置されたなど、電気系教室の改組が進められていることや、写真で見える最近のキャンパスの様子ならびに卒業生の進路等をご紹介いただきました。

また、小嶋先生の研究分野、宇宙空間のプラズマ波動現象を電波で観測する研究における最新動向についてのご講演では、先生の研究室で開発した観測装置を搭載した水星探査機が8年の歳月を経て、この11月に水星に到着する予定であり、今後、水星における様々



中部支部総会 集合写真

な現象の観測が進められるであろうこと。今、世界では月の開発に向けた様々なミッションが進められているが、月には大気がないために、太陽・宇宙プラズマが直接入ってくることに加えて、レゴリスというガラス系の非常に導電率が悪い細かい砂粒が存在しており、帯電する細かい砂粒が、人間の月面での活動や健康にも影響を与えていると考えられることなど、宇宙開発の最前線をご紹介いただきました。最新の研究成果を分かりやすくご説明いただき、会場の聴講者は興味津々に聞き入っていました。

その後の懇親会では、小森顧問の乾杯挨拶から始まり、ホテルのコース料理を楽しみながら、参加者全員が自己紹介・近況報告を行って交流を深め、次回以降の会行事での再会を祈念しながら散会となりました。

濱野 正嗣(平7年卒) 記

2026年 北海道支部 総会の開催について

去る7月12日(日)札幌市内の京王プラザホテル札幌にて、2026年度の北海道支部総会を開催いたしました。来賓として本日から吉井和佳教授にお越しいただきました。

会員参加者は5名でしたが、継続的に参加いただいている会員の方に加え、今年度から新たにメンバーに加わっていただいた方も1名いらつしやり、また遠方にもかかわらず本日から吉井先生にお越しいただき、幹事としては大変有難い状況でございました。今後北海道にいらつしやる会員の方にできるだけ参加いただけるように取り組んでいきたいとの思いをあらたにいたしました。(もし、北海道にいないのに支部総会の連絡がきていないという場合には、洛友会のHPで公開させていただいている佐野の連絡先に一報いただければ幸いです)

総会は、本元支部長から開会のご挨拶をいただいた後、会計報告や本部役員会の内容共有といった議事を取り進めました。予定されていた支部総会としての議事を終えた後、本日からお越しいただいた吉井先生より、「本部の状況」「取り組まれている研究内容」について詳しくご紹介をいただきました。

その後、懇親会に進み、本元支部長の乾杯により始まり、食事を楽しみながら、支部会員の近況や

吉井先生からご紹介いただいたAIに関する話題で盛り上がり、美味しい食事とお酒も進み楽しい時間となりました。予定していた二時間があつたという間に過ぎてしまい、また来年の再会を願いながら、写真撮影も行い、お開きとなりました。

以上、簡単に恐縮ですが、北海道支部総会開催のご報告とさせていただきます。

佐野 大輝(平16年卒) 記



事務局だより

訂正

洛友会会報第293号(7月号)3ページ5段目後ろから10行目の高野登志裕様の卒業年が間違っておりました。

正しくは左記の通りです。

昭63年 高野登志裕(現)

訂正してお詫びいたします。

令和8年度懇話会開催のご案内

在校生(学生会員)と卒業生(正会員)の親睦をはかり、在校生に先輩からのメッセージを伝えて激励するために、洛友会と電気系教室との共催で懇話会を毎年開催しています。今年度は左記のように開催されますので、奮ってご参加下さるようご案内いたします。

詳しいプログラムと参加登録は、ホームページにてお知らせいたします。

記

日時…令和8年11月24日(火) 15時30分～17時10分
場所…吉田キャンパス電気総合館 大講義室
懇親会…吉田キャンパス 北部食堂 2階

プログラム(予定)...

15時30分 開会挨拶

電気電子工学科科長 佐藤 高史教授

15時35分 「教科書とWikipediaとAI」

北野 正雄 先生(京都大学名誉教授)

16時20分 「大阪ガスグループの電力事業と

姫路天然ガス発電所の建設」

馬場 量太 氏(大阪ガス株式会社・平12年卒)

17時05分 閉会の辞

17時30分 懇親会(会費…社会人3,000円、学生無料)

懇話会HP: <https://www.seetkyoto-u.ac.jp/ia/information/konwakai>

連絡先…電気電子工学科事務室

電話…075-1753-5273

Eメール: konwakai@kuee.kyoto-u.ac.jp

訃報

昭28	久保 光男	7・12・15
昭29	山下 義雄	
昭30	福川 幸男	8・7・21
昭36	井上 靖彦	8・6・19
昭36	杉本 眞生	8・7・6
昭36	鈴木 嘉雄	8・6・20
昭39	河本 太郎	7・11・14
昭40	近藤 秀也	7・7・29
昭40	堀 重明	8・6・21
昭40	佐野 守彦	8・5・21
昭44	杉山 博男	
昭44	瀬戸 研一	8・7・17
昭48	宇土 顕彦	8・4・9

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。